

<研究ノート>

クリスチャン・ヘラルド紙の東北大飢饉支援のための寄附金集め

— アメリカ市民のアジアへの関心の高まり —

西 崎 緑

はじめに

本研究は、アメリカのキリスト教新聞クリスチャン・ヘラルド紙が東北大飢饉（1905～6年）被災者に対する支援として行った寄附金集めの実態と、その背後にあった当時のアメリカ中産階級の人々のアジアへの関心と連帯意識を明らかにすることを目的としている。

1906-07年東北大飢饉の被災者支援活動に関する研究としては、在日宣教師の被災者救助活動とニューヨーク・タイムズやクリスチャン・ヘラルド紙との関係を描いた M. William Steele (2013) 「The Great Northern Famine of 1905-1906: Two Sides of International Aid」¹⁾ や、岡山孤児院に対する海外からの寄附金について触れた菊池義昭 (2021) 「1899年8月からの岡山孤児院の海外幻燈遊説隊の巡回運動とその周辺」²⁾、仏教界が東北大飢饉に対して行った救済について機関紙「中外日報」記事を考察した小笠原正道 (2016) 「明治三十八—三十九年東北大飢饉と仏教—『中外日報』をめぐって—」³⁾ がある。これらの研究はいずれも日本での状況を史資料により明らかにしたものである。これらに加えて本研究ではアメリカ市民が如何に日本の災害を捉え支援活動に至ったのか、現地の新聞の論調から辿っていく。基本的には、第一次史料として、クリスチャン・ヘラルド紙（ペンシルヴァニア大学 online archive 所蔵・公開中）vol. 29 (1906) を素材に、日本の東北大飢饉

の状況描写、紙上キャンペーンとその論調、毎号掲載された寄附者リストを概観する。

1. 明治 38～39 年東北大飢饉について

東北地方は、天明の大飢饉をはじめ、度々凶作に見舞われてきたが、明治 38～39 (1906-07) 年の大飢饉は、「国内的・国際的に連携して危機救済にあたった最初の大きな事例」(Steele, p. 4) と言われている。大凶作で特に被害が大きかったのは、低温、低日照の影響が大きかった岩手、宮城、福島の三県であった。この三県では、明治 38 (1906) 年の収量が通常の年の 1～3 割という状況であり、そのため翌年にかけて深刻な飢餓状態が生じるようになった。これに対して衆議院が政府に対して窮民救済を行うよう建議するなど、公的にも大きな関心が寄せられ、三県の住民 300 万人中 70 万人が極窮民として官簿に登録されて救助を受けた。

このとき三県の住民を苦しめたのは、大凶作という自然災害ばかりではなく、日露戦争 (1904-1905) による重税及び兵士の供出があった。たとえば福島県では、同年臨時県会が開催され大飢饉対策が協議されたが、明治 35 (1903) 年の凶作で民力が回復していないうちに日露戦争に伴う重税があり、その上に明治 38 年の大凶作に遭遇して県民の生計上の困難は名状しがたいという意見が出されていた。また日露戦争には、最下層の農民の中から二個師団に兵

1) 『国際基督教大学学法 3-A』アジア文化研究 39, 1-15

2) 『石井十次資料館研究紀要』22, 51-125

3) 『法学研究』89 (6), 85-95

が供出され、彼らは帰郷と同時に大凶作に遭遇していた(福島県凶荒誌)⁴⁾。

この大飢饉に際して外国人宣教師たちが救援組織を立ち上げて支援を行ったことは、宮城県の凶荒誌に掲載されている(Steele, 小川原)。その中心となったのは、ドイツ改革派教会の宣教師ウィリアム・ランプ(William Lampe)である。彼を中心に結成された海外支援委員会は、世界中のキリスト教会やメディアを通して海外からの義捐金を集めることを目指して活動を行った。この宣教師たちの義捐金集めに大きな役割を果たしたのが、アメリカのクリスチャン・ヘラルド紙である。

2. クリスチャン・ヘラルド紙とは

クリスチャン・ヘラルド紙は、ジョセフ・スボルジョン(Joseph Spurgeon)が1878年にニューヨークで創刊した福音派キリスト教の週刊新聞である⁵⁾。この時代は、第三次大覚醒(1850年代~1920年代)の時代にあたり、リバイバルが目前にきていると信じた福音派キリスト教徒が宗派を超えた大祈祷運動を繰り広げていた。1870年代には、有名な説教者ドワイト・ムーディ(Dwight Moody)が東部から中西部にかけて巡回説教を行って個人と社会の両方に悔い改めを迫り、多くの人々が影響を受けたことはよく知られている⁶⁾。

クリスチャン・ヘラルド紙の創刊にあたったジョセフ・スボルジョンは、改革派バプテスト教会の牧師であり、人々への伝道を積極的に行う一方で、貧困救済にも熱心に取り組んだ。彼に多大な影響を与えたのは、従弟のチャールズ・ハッドン・スボルジョン(Charles Haddon Spurgeon)である。チャールズ・

スボルジョンは、イギリスのバプテスト派牧師で、ビクトリア朝の社会問題に対して積極的に行動し、救貧院やストックウェル孤児院(Stockwell Orphanage)を開設した⁷⁾。

なおアメリカのクリスチャン・ヘラルド紙は、マイケル・P・バクスター師がロンドンで発刊した同名の新聞の名前をとってアメリカでも発行することにしたものである。クリスチャン・ヘラルド紙は、その後1927年にダニエル・ポーリング師を編集長に迎えてキリスト教関係書籍を紹介する「家庭文庫」コーナーを連載して人気を博したが、購読者数が徐々に減少したため、1992年に廃刊となった。クリスチャン・ヘラルド社自体は、出版活動を停止したものの、その後も慈善活動組織として継続したが、2006年に解散している。

3. ルイス・クロプシュ時代のクリスチャン・ヘラルド紙の寄附金集め

科学的慈善やロックフェラーなどの大富豪による慈善事業がアメリカの貧困救済と社会福祉事業の中心となる時期以前、つまり19世紀末からの世紀転換期に、クリスチャン・ヘラルド紙は、庶民のプロテスタント信仰と慈善活動を結び付ける慈善文化を発展させる役割を担った。たとえば同紙は、1895年に財政難に陥っていたニューヨークのパワリー・ミッションを買い取り、移民の子女やホームレスの支援を継続できるようにした⁸⁾。

さらに1899年にクリスチャン・ヘラルド紙を買い取ったルイス・クロプシュ(Louis Klopsch)の時代になると、慈善事業を拡大し、国外の被災者への支援も行うようになった。クロプシュは、1852年

4) 庄司吉之助「東北地方における凶作の史的諸問題覚書—福島県下凶作の原因と農民層の構成変化について—」p. 40

5) クリスチャン・ヘラルドは、1992年に廃刊となっている。

6) ムーディ自身はさまざまな慈善活動を熱心に支援したが、社会問題は個人の神聖な再生によってのみ解決できると感じていた。彼はリバイバルを先導し、マサチューセッツ州ノースフィールドで年次聖書会議を開催した。

7) スtockウェル孤児院は、1867年にチャールズ・ハッドン・スボルジョンによって現在のロンドンのストックウェル・パーク・エステートに設立された。1869年9月から児童の受入を始めたが、当初は6歳から10歳までの父親のいない少年たちを収容していた。年間約5,000ポンドの費用で250人を収容したと言われている。1879年に孤児院の宿泊施設が拡張され、女子も受け入れるようになった。この孤児院は、第二次世界大戦時に廃止されている。

8) ニューヨークのパワリー・ミッション(1879-)の支援

プロシアで生まれ、翌年母親が死亡すると父のアメリカ移住に伴って渡米した。彼は、学校卒業後、ジャーナリストとなり、社会問題の解決に関心を持つようになった。

クリスチャン・ヘラルド紙の庶民への影響力を伸ばしたのは、19世紀半ば以降の改革派および長老派を代表する牧師トーマス・デウィット・タルマッジ (Thomas De Witt Talmage) 師であった。1890年にクロブシュがタルマッジを主筆とした結果、購読者数は25万人に伸びることになった。これは、当時の代表的福音派新聞 *Sunday School Times* の2倍近い購読者数である。福音派キリスト教徒の家庭でタルマッジの人気の如何に凄まじいものであったかが窺い知れる。

クロブシュは、この購読者に呼びかけて、国外のさまざまな災害に対して救助キャンペーンを展開した。1906年東北大飢饉以前にも寄附金集めがあり、当時の庶民からの寄附金集めとしては多大な組織力を持っていた。クリスチャン・ヘラルド紙上における災害支援金の呼びかけは、1892年のロシア飢饉のときを最初として、1896-97年のインド飢饉、1906-97年の東北大飢饉、1908年のイタリアのメッシーナ地震のときに実施されている。なお東北大飢饉へのクリスチャン・ヘラルド紙の多額の寄附に対してクロブシュは、後に明治天皇から旭日章を授与されている。

こうした国外、とくに太平洋アジア地域への支援は、1890年にアメリカ合衆国が「フロンティアの消滅」を宣言したことと関係があると思われる。このフロンティア消滅によって西部開拓時代は終了したが、その先にあるラテンアメリカと太平洋地域への覇権拡大意識はアメリカ国内で高まっていたからである。アメリカ合衆国は、1893年にハワイ王国を武力によって倒し、1898年にアメリカ準州として併合した。1898年には米西戦争に勝利してフィリピン、プエルトリコ、グアムを獲得し、さらにキューバの保護国となった。そうした時代背景を考えると、神の国をこの世に実現することを究極の使

命と考える福音派キリスト教徒とアメリカ帝国主義（特に外交政策）双方の関心が、同時期にアジア太平洋地域に向かっていったと考えることができる。

3. クリスチャン・ヘラルド紙と石井十次

石井十次は、1887年に岡山に「孤児教育会」の看板を掲げて孤児の養育を本格的に始めた。その後「岡山孤児院」と名称を変更した。1892年に濃尾大震災の被災孤児や岡山市大洪水の被災孤児を引き取ったため、孤児の数は急増した。石井は、おなかいっぱい食事を与える「満腹主義」や、子ども一人ひとりと向き合う「密室主義」、保育士を中心に子ども十数人が小さな家で生活する「家族主義」などの先駆的取り組みを次々に行い、1898年からは孤児たちによる音楽幻燈隊を仕立てて全国各地を巡らせて寄附金集めも行った⁹⁾。

岡山孤児院の慢性的資金難を支援するため、イェール大学留学中であった同志社大学出身の牧師、牧野虎次は、石井十次著の『岡山孤児院』や、岡山孤児院の写真集の内容を英訳し、クリスチャン・ヘラルドに投稿した。この岡山孤児院の紹介記事は、同紙1902年1月15日号 (p. 47, 60) に掲載された。牧野は、岡山孤児院がイギリスのジョージ・ミュラーの孤児院をモデルにしたキリスト教主義で子どもたちに教育を施していることや石井夫妻が孤児たちのことを真摯に考えて夜も眠れぬほど熱心に祈っていることを書いていた¹⁰⁾。

この牧野の記事を読んだ読者から、実際に寄附金がクリスチャン・ヘラルド社に届けられ、それを同社が岡山孤児院に届けたとされる。(この間の経緯については菊池「1902年2月からの林長知によるハワイでの岡山孤児院の幻燈隊の巡回運動とアメリカ在住の同院関係者の動向」p. 146) 参照。)

石井は、その後1905年に孤児を無制限に收容することを宣言し、1906年に東北大飢饉が起きたときには、実際に東北地方から824人の貧窮孤児を引き取った。岡山孤児院の收容人数は、その結果

9) 音楽幻燈隊は、ハワイやアメリカ本土での公演も行った。

10) 石井十次は、1887年来日したジョージ・ミュラーの同志社での説教に共鳴し、日本のミュラーになることを決意した。

1,200人に達した。本稿後段で述べるクリスチャン・ヘラルド紙から送金された寄附金も、宣教師たちの手によって一部が岡山孤児院に送られている。

4. クリスチャン・ヘラルド紙と東北大飢饉の救援基金

(1) 救援基金設立

クリスチャン・ヘラルド紙に東北大飢饉の記事が初出したのは、1906年1月31日号 (Vol. 29, No. 5, p. 87) である。「飢饉に襲われた日本、北部地域で約100万人が餓死を目前に助けを求めている！」とセンセーショナルな見出しがつけられ、力尽きた赤ん坊を背負った少女の挿絵と茅葺屋根の水車小屋の絵が記事に挿入されていた。見出しの下には12月16日付政府発表の推計をもとに被害状況の数字も囲み部分で掲載されていた。それによれば、人口1,174,034人の福島県で30万人、人口749,927人の岩手県で112,600人、人口899,279人の宮城県で28万人が飢饉に苦しんでいて、三県合わせると692,600人が飢饉状態にあると書かれていた。1月18日付 *Tokyo Cable Dispatch* では、この状態が悪化し96万人が餓死の危険があるということも付け加えられていた。

この日の記事によれば、約1か月前から在日宣

教師と日本のキリスト教徒から東北地方で飢饉が広がっているとクリスチャン・ヘラルド紙宛ての手紙で報告されていたという。農民、職人、あらゆる階層の働き手たち何十万人もが日本とアジアがロシアの支配下になるのを防ぐために前線に赴いたために、農地は荒れ果て、老人、女、児童は取り残されて貧困に苦しんでいる。控え目に見積もっても東北地方では96万人以上の人々が飢えているが、政府はそれを認めようとしない。県レベルでは状況が絶望的になったため、救済システムを稼働させてできる限りのことをしているが、県内で得られる援助では全く不足している。それゆえ宣教師たちが、アメリカの人々に援助を訴えてきたことを説明している¹¹⁾。

またクリスチャン・ヘラルド紙が受け取った手紙の中から、横浜在住のアメリカ聖書協会のルーミス (Loomis) 牧師からの手紙が紹介されている。それによれば、「日本の役人は、自発的な寄附に対して大変感謝すると思うが、物乞いとして世界の人々の前にその姿を晒すことには抵抗感がある。そのため自分が(東北の人々の)苦しみを和らげるために(アメリカの人々の)支援を求める。このような行動は、日本人にキリスト教の精神と、彼らの福祉に私たちが真摯な関心を持っていることを示すことになる。」という内容が記されていた。

同様にアメリカに留学中の小川忠蔵神学生からも、

11) ランプ宣教師たちの署名入りアピールは以下の通り。「宮城県、福島県、岩手県の3県(人口2,821,557人)は、約60年前の天保時代の致命的な飢饉以来最悪の飢饉に直面している。とくに宮城県の惨状は甚大で、ある新聞には「この地方の人々に死刑判決が下された」とある。この文章を「住民の3分の1」という言葉で修飾するならば、それは文字通り真実です。宮城県の人口89万9千人のうち、少なくとも28万人が極度の苦境に陥っており、援助なしでは命を救うことができません。この状況に関する公式発表によると、何十万人もの人々が冬の間だけでなく、春の間中、そして新しい作物が収穫されるまでの間、さらに耐え忍ばなければならないという激しい苦しみにあるということです。迅速な援助の必要性を示すために、主な事実を報告します。宮城県は群を抜いて最悪の状態です。1200万円相当の米が平均的な収穫量ですが、今年の収穫量は12%未満で、米だけでも1000万円以上の損失があります。これは、この県の25万人以上に対する死刑判決です。福島県の人口は1,174,024人です。米の平均収穫量は18,553,900円相当です。今年の収穫量は4分の1以下で、4,619,762円の価値しかなく、米だけでも約1400万円の損失です。しかし、この損失は主に県東部で発生し、収穫量は平均的な年のわずか15%です。詳細な統計によると、すでに約30万人が困窮し、絶対的貧困の淵に立たされていることが分かります。岩手県の収穫量は平均の3分の1、南部の稲作は例年の5分の1にとどまり、人口74万8254人に対して454万3750円の損失です。10万人以上の人々が、迅速かつ長期にわたる支援なしには生きていけないことは確かです。すでに何千もの人々が低木の根と木の皮を食料としており、それによって一時的には生命が維持されるかもしれませんが、少なくとも計算では68万人が極限状態に直面しています。これが哀れな女性や子どもたちにとって何を意味するのか、この迫り来る悲惨さの中心にいる私たちは、言葉では言い表せません。このアピールは、日本人から発せられるものではなく、この地方に住み、人々や当局と交流を持つ外国

「豊かなアメリカ」のキリスト教徒に支援をお願いする手紙が届いていることが報告されていた¹²⁾。

(2) 読者からの反応

Vol. 29 No. 6 (2月7日号) p. 112には、読者から編集部宛てた次のような手紙が紹介されている。「編集部へ：苦しんでいる日本への援助を求めるあなた方の呼びかけは、自由と進歩の友がいるところならどこでも、寛大な対応で迎えられべきだと信じています。日本とロシアの戦いは、文明と野蛮との戦い、自由と専制政治との戦いでした。もしこの小さな国がこれほど勇敢に戦わず、戦争に負けていたら、アジア全土がロシアの支配下に落ちたでしょう。アメリカの利益は、商業的にも、宣教的にも、ひどく損なわれていたと思います。われわれは日本に対して同情以上の義務を負っています。私たちは日本に返しきれない借りを負っているのです。飢えに苦しむ農民を養うために、小麦粉を船に積んで、必要であれば2隻の船を仕立てて友情を証明しましょう。J.R. マグド(ニュージャージー州パターソン)」

編集者はこの手紙を評して「過去2年間に極東での出来事を見てきたほとんどのアメリカ人の考えを表していることは間違いありません。我々だけでなく、文明世界全体は、中国を混乱から救っただけでなく、全アジアを飲み込んで世界の半分の運命を変えようとしたロシアによる征服の波を押し戻した勇敢な島国に債務がある(後略)」と述べている。

クリスチャン・ヘラルド紙の読者の多くは、東部在住の「普通の市民」である。上記の手紙(特に筆

者が下線を加えた部分)からは、環太平洋地域への関心が政治家のみならず一般市民にも共有され、ロシアとの覇権争いの中で日本を味方につける必要性が強烈に意識されていることがわかる。クリスチャン・ヘラルド紙が東北大飢饉の被災者支援のために多額の寄附金を集めることが可能であったのは、単なる被災者に対する一般市民の同情だけではなく、帝国主義段階に入ったアメリカの社会意識があったからと言えるだろう。

(3) 寄附金が集まり始めたことが報告される

Vol. 29 No. 7 (2月14日号) p. 137には、葬式行列の絵と田植えの絵が脈絡なく掲載されているが、田植えの絵を見せることにより、東北地方が日本の穀倉地帯と印象づける意図も感じられる。記事の見出しは、「日本の飢饉の訴えが聞かれた。クリスチャン・アメリカは、北部の被災した農民を支援し、救援基金を開設」となっていた。本文の内容は以下の通りである。

「日本の悲惨な窮状は、アメリカ人の心を揺さぶっている。クリスチャン・ヘラルド紙は、飢饉に見舞われた東北地区の農民を救援する寄附を受け取っています。最も豊作であった年でさえ、この地域の人々は非常に貧しかったが、主食の米をほぼ完全に喪失したことは前代未聞の経験でした。日本在住のアメリカ人宣教師たちは、彼らに代わり緊急の嘆願してきました。なぜなら政府が単独で飢饉にうまく対処することは望めないこと、そして命を救い、計り知れない苦しみを避けるためには、外部からの援助が来なければならないことを知っているからです。

人から発せられるものです。日本人は意気揚々としているが、試練や災難の時には相当な同情を寄せる人たちです。人類共通の名において、私たちは迅速かつ寛大な援助が必要であることを訴えます。

W.E. LAMPE, 会長。CS デイヴィソン。C. ジャケット。J.H. デフォレスト。M.B. マッデン。G.A. フォレスト。ウィリアム・アクスリング。」(筆者訳)

- 12) 小川忠蔵神学生は、以下のような内容を述べている。「私は、数年前にインドの飢饉でクリスチャン・ヘラルド紙がどんなに良い仕事をしたかを覚えています。貴紙は、何人かの宣教師からすでに手紙をもらっているかも知れませんが、あなたの国のクリスチャンは、善行を惜しみません。疲れ果てた日本に少しでも助けが来るとすれば、それは「豊穡の国」からです。戦争直後で国家財政と人手が明らかに不足しているため、飢饉による窮乏と稼ぎ手の死別が貧しい人々を特に苦しめています。キリストの名において、彼らの苦痛を和らげるために何かできないでしょうか。戦争がなければ、日本政府は単独でこれらの人々の救済ができたはずですが、今はほぼ不可能です。もし神がそう望まれるなら、困窮の中にある人々へのあなたの支援によって、日本に福音を伝える道が開かれるかも知れません。日本は、このような親切を非常に高く評価するでしょう。」

在日アメリカ聖書協会のルーミス牧師は、現在、クリスチャン・ヘラルド紙のために飢饉の調査をしており、救済の方法について後に報告する予定です。その間、必要な救援物資を提供する作業は、精力的に推進されなければなりません。」そして陸軍省が備蓄品を放出しているが、それもすべての人には行き渡らず、飢えのために「75%の刻んだ藁と25%の外国米からなる丸い練炭の形」のものを食べている人々がいるというショッキングな現場報告も掲載されていた。

なお皇室に対するクリスチャン・ヘラルド紙の論調は、終始好意的である。ここでも天皇皇后両陛下が被災者のために、私的財産から25,000ドルを寄附したことが書かれ、「これは、日本の主権者の財政がヨーロッパの支配者の財政と比較して非常に控えめな規模であることを考えると、大きな貢献です」と高評価を下している。これに対して、日本政府に対しては「児童がやせ細り生存の危機にある」にも拘わらず「依然として外国への支援要請を行っていない」と厳しく批判している。

宮城県の前崎村や柴田村における具体的な被害状況と村民全員が飢え死にの危機にあることが報告された後、クリスチャン・ヘラルド紙に掲載されたアピールに応じて、読者から寄附金が届いていることが報告された。寄附者の名前と金額を見ると、高額寄附者はなく、30ドル1人、25ドル4人、20ドル3人、15ドル1人、10ドル17人、10ドル未満がほとんどであった。(当時の10ドルは、今日の約300ドルに相当する。)

(4) その後の寄附金集めの展開と大統領のメッセージ掲載

Vol. 29 No. 8 (2月21日号) p. 159に掲載された記事の見出しは「全員が日本を救いたいと真摯に願う 飢餓に苦しむ村を救うクリスチャン・アメリカー多くの州からの寄附」であり、寄附者が増加していることが書かれていた。寄附者名と金額を見ると、ほとんどは1ドルから5ドルの少額寄附者であるが、20ドル、25ドル、30ドルの寄附者もあり、中には100ドル1人、300ドル1人の寄附者もあった。またこの号の挿絵は、藁束を担ぐ農家の女性2人であった。

そのほか朝日新聞社が国内で義援金募集を行っていることやニューヨークの日本領事館が在米日本人に対して、東北飢饉被災者への支援を要請したことなど、日本側の努力の報告もあった。次いで、ランプ牧師の宮城県栗原郡の実地見分の結果以下のような具体的数字での報告があった(表は記事より筆者作成)。

	栗原郡全体	一迫村	長崎村
人口	92756	5,356	1,937
餓死寸前者	41541	3,736	1,117
平常生産(石)	162,000	8,340	4,449
平常生産(石)	12,000	185	82

Vol. 29 No. 9 2月28日号 p. 183の見出しは「最初の1万ドルが飢える日本に クリスチャン・ヘラルドから電送 ローゼヴェルト大統領の強力なアピールー命を救うために更なる緊急支援を要する」となっており、記事の中央には、仙台救援委員会会長のランプ牧師と13人の日本人クリスチャン青年の写真が掲載されていた。

記事の内容は、クリスチャン・ヘラルド社が集めた寄附金のうち最初の10,000ドルが、食糧支援にのみ使用するという条件をつけて、2月14日に日本赤十字社総裁松方卿あてに電信送金されたことと、セオドア・ローゼヴェルト大統領からの以下のようなメッセージであった。「北日本の飢饉状況は、当初の想定よりもはるかに深刻であることが判明し、数千人が飢餓の危機に瀕している。それは、どの国にも時折降りかかるような災難である。国家は人間と同じように、苦境に陥ったときに互いに助け合えるよう常に準備を整えておくべきである。私はアメリカ国民に対して自らの豊かさの中から、偉大で友好的な国である日本の苦しんでいる同胞たちを助けてくださるよう訴える。」セオドア・ローゼヴェルトは、米西戦争時には義勇兵を率いてキューバで戦い、国民的人気を獲得していた。外交では、カリブ海や太平洋への膨張政策を強力に推進している最中で、このメッセージも彼の帝国主義政策の一環として捉えることができる。

また仙台のドイツ改革派教会牧師ランプ(W. E. Lampe)を中心に、メソジスト教会牧師のデビッドソ

ン (C.S. Davidson), カトリック教会神父のジャック (C. Jacquet), Goo College のデフォリスト (J.H. DeForest), キリスト教会牧師のマッデン (M.D. Madden), バプテスト教会牧師のアックスリング (Wm. Axling) と日本人青年も加えて救援委員会が設立されたことが報告されていた¹³⁾。

Vol. 29 No. 10 (3月7日号)の表紙には、日本への救援の関心を集めるためと思われるが、昭憲皇后の洋装写真が大きく掲載されていた。p. 202の記事の見出しは「何百人もの人が今、飢饉で亡くなっている 被災地の日本に冬季の寒さが厳しい—飢餓の人々を養うためにクリスチャン・ヘラルドから追加支援の1万ドルが電送された」であり、大飢饉の前の若い農民の姿が挿絵で入っていた。記事の内容は、10人の生徒のうち8人が弁当を持ってきていないことや12月にはまだ元気だった子どもたちが現在では痩せて元気がないこと、前回の送金は全て食糧に使用されていたことを確認したので、追加で1万ドル送金したことであった。また、ニューヨークの寄附者名と金額が下部に掲載されていた。p. 203には日本赤十字社のこと、その理事たちのことが写真入りで紹介されていた。

Vol. 29 No. 11 (3月14日号) p. 223には、見出し「飢饉の地の様子 クリスチャン・ヘラルド通信員からの最初の写真」として、飢饉の被害者の農民の写真が初めて掲載された。少女が鍋の前に座っている写真には、厳寒の冬季を迎えても土間にむしろの生活で少量の食糧が配布されても餓死の危険は益々高まるばかりであると説明され、郡役人と区長が老婆に食糧を渡した写真、老婆と孫が戸口に座って救助を待っている写真の3枚がそれである。また、先に送金した20,000ドルの受取証が日本赤十字社から届いたことが報告された。

記事の内容には、夜逃げする家族、娘を売り飛ばす親(9歳の娘が36セントで売られ、親は北海道に出稼ぎに出た)、草の根やダイコン葉、蕪なども

食べつくしたとあり、食糧支援は、他地区の種もみ用の米、乾燥サツマイモなども購入して配布しているが、不足していることが書かれていた。日本の救済制度の問題として、地震や水害等の緊急支援の法はあるが、凶作には支援を行う法律がないことが指摘されていた。

この号では、初めて寄附者名簿が州別にまとめられた。ニューヨークが半数を占めている。コネチカット、デラウェア、DC、ジョージア、メリーランド、ミシガン、ニューハンプシャー、ニュージャージーの各州から寄附があったが、いずれも個人の少額寄附であった。

Vol. 29 No. 12 (3月21日号) p. 250-251には、追加で15,500ドルを今週送金するとあり、宣教師からの報告には、寒さの中で餓死者が多数あり、自殺者も出ていること、救済のために、政府は農民を雇う事業を始めたことなどが報告されていた。

1906年のニューヨーク州とペンシルヴァニア州の寄附者リストがp. 251全面に掲載されていたが、寄附者数は多くなったものの、極めて少額(25セントや50セント)の寄附が目立つようになっていた。

Vol. 29 No. 13 (3月28日号) p. 279には、追加で50,000ドルが送られ、赤十字と宣教師たちの労力で寄附が有効に活用されていることが報告されていた。寄附者からの温かいメッセージを翻訳して届けられたらどんなによいかとも書かれていた。この号には、自分の夕食を日本のために捧げた少年のことや、匿名で500ドルを寄附した紳士のことなどの美談が掲載された。p. 280には、3月9日までの寄附者名簿が掲載された。

Vol. 29 No. 14 (4月4日号)の表紙には、救援所まで歩く母子のイラストがあり、p. 299には、セオドア・ローズヴェルト大統領からクリスチャン・ヘラルドとその読者が行った総額10万ドルの寄附に対して感謝を伝える電報が掲載された。記事の内容

13) 宣教師たちからのレポートには、蕪ケーキの作り方や毒ではない食べ物の紹介がなされていた。ランプの報告には、40,000人が被災しており、来年5月までに100,000ドル近くの資金が食料供給に必要であること、茹でた葉っぱと籾殻を混ぜて食べる子供たちを見たこと、「朝食は家族全員で作っていた...中には病的な緑色のものもあり、それを見て胃が痛くなりそうになりました...別の家では、朝の食事は大根の葉と殻でした」などの生々しい記述もあった。

には宣教師たちからのレポートもあった。寄附者が1,500人以上に達したことが記されていた。

Vol. 29 No. 15 (4月11日号) p. 326の社説では、日本の餓死者数が増加していることに触れている。日本の画家が描いた飢饉のイラストが掲載されており、3月23日までの寄附者名簿も掲載されていた。

Vol. 29 No. 16 (4月18日号) p. 355には、3月30日までの寄附者名簿が掲載され、飢饉が少しずつ収まってきたこと、しかしながら緊急的な救済はまだ必要であることが書かれていた。

Vol. 29 No. 32 (1906年8月8日号)では、「感謝の言葉を送る日本国民」と題した報告がなされていた。以下は、その内容である。「ワシントンD.C.のロバート・ベーコン國務長官代行を通じて、クリスチャン・ヘラルド紙は、福島県三春町長の松方氏と近隣の29の村の長が署名した駐日米国大使への手紙の写しを受け取りました。この書簡において、大使は、飢饉救済のための寛大な貢献に対する日本国民の感謝の意を大統領と米国民に伝えるよう要請されています。手紙にはこう書かれています。

貴国は、東北地方で飢饉が発生した際、直ちに我々に深い同情を寄せました。閣下には、我々に与えられたお金、被災者を救うために有益に使われたことをお伝えしたいと思います。謹んで、閣下がわざわざ米大統領閣下に感謝の意を伝えてくださるようお願い申し上げます。」

また「特筆すべき飢饉の被害者」としてJ.H. ペッティー宣教師からの岡山孤児院の働きについての報告も掲載されていた。「今日、日本の岡山孤児院には1,200人の子どもたちがいます。その3分の2にあたる800人以上が飢饉の被害者です。クリスチャン・ヘラルド基金からの12,500ドルの特別寄附と、世界中から集まった多くの小さな寄附のおかげで、この半飢餓の子どもたちは、食事と衣服と住居を与えられています。過密状態を防ぐためにさらに10棟のコテージが必要であり、また大きな礼拝堂は差し迫った必需品です。今や職員と子どもたちのミーティングはすべて青空の下で開催されなければなりません。改良された工業プラント、より多くの土地、その他多くのものが緊急に必要とされていますが、それらはやがて実現するでしょう。これは、主の働きを遂行するために必要なものために信仰をもつ

て祈る施設の一つなのです。新しいコテージの1つは「ヘラルドホーム」と名付けられるでしょう。岡山孤児院の偉大な仕事に対して寄せられた本紙の読者の同情は、これからも感謝され続けるでしょう。東北から来た野生児たちの状態は、孤児院の親切でしっかりとした規律の下で日々改善されています。それでも12人の虚弱児童が、念入りな看護にもかかわらず死亡してしまいました。伝染病も、罹患した子どもたちから(孤児院に)持ち込まれました。孤児院の病院は70人の麻疹患者と30人のその他の患者であふれかえり、さらに150人の幼子たちが目の痛みの治療を毎日受けました。伝染病がほぼ根絶された今でも、孤児院の病院にはまだ75人の患者がいます。市内の宣教師の一人は、毎週、家政婦たちと集会を開き、そこであらゆる種類の有益な指導を行っています。訪問者は、このユニークな施設を視察するために遠くからも近くからもやって来ます。素朴な農民たちは、小屋の前を通ると、1円札や5円札を塀越しに投げ入れて、「お前たちの頑張りの足しにしてくれ」と声をかけてきます。天皇陛下からも1,000円(500ドル)の贈り物が届きました」。

Vol. 29 No. 47 (11月21日号) p. 976には、見出しに「大飢饉は収まった クリスチャン・ヘラルド紙の現地取材によれば日常が戻った」とあり、今年は、例年の20パーセント増の米が収穫されたとあった。

おわりに

東北大飢饉に際し、日本政府は、日露戦争の出費のため財政難に陥っていたため、十分な救済ができなかった。しかし政府は、対外的な面子を保ちたいため外国に対して支援を求める姿勢をとれなかった。(少なくともクリスチャン・ヘラルドはそのように解釈した)。そこでクリスチャン・ヘラルド紙は、日本の飢饉の情報を積極的にアメリカのクリスチャンに向けて報道し、多額の寄附を集めて日本の宣教師や赤十字に送金した。それを通じて、海外宣教への読者の関心を喚起しただけではなく、大統領のメッセージを加えるなど、アメリカ合衆国のアジア進出を市民に意識づける役割を果たした。

なお送金された寄附金は、日赤と宣教師によって管理され、食糧支援にのみに使用された。

寄附者は、ニューヨーク州の個人（キリスト教徒）が大多数であり、クリスチャン・ヘラルドの呼びかけに対して、個人が少額の寄附を行った。時間が経つにつれて寄附者は増えたが、1ドルに満たない寄附が増加したので、人々の関心も薄れていったのだと思われる。

【資料および史料】

Curtis, Heather D. (2018) *Humanitarians: American Evangelicals and Global Aid*. Harvard University Press.
Pepper, Charles Melville (1910) *Life-work of Louis*

Klopsch; romance of a modern knight of mercy. Christian Herald.

菊池義昭 (2021) 「1899年8月からの岡山孤児院の海外幻燈遊説隊の巡回運動とその周辺」『石井十次資料館研究紀要』22, 51-125.

菊池義昭 (2023) 「1902年2月からの林長知によるハワイでの岡山孤児院の幻燈隊の巡回運動とアメリカ在住の同院関係者の動向」『石井十次資料館研究紀要』24, 125-156.

Christian Herald Vol.29 No.5 - 47. (The Internet Archives)

<https://onlinebooks.library.upenn.edu/webbin/serial?id=christianherald>.